

だいちゃんのだいぼうけんシリーズの3
～アムール編～



～西風 そら～

この作品の著作権は、西風そらにあります

<http://nisikaze.sakura.ne.jp>

旅を再開するに当たって、柿ただちゃんは、だいちゃんと風すっかに約束させられた。

「いい？ 二度と凍み柿にならないように、暖くなるまではシマシマ合羽を離しちゃ駄目だよ。僕と風すっかが、今日は寒いって判断した日は、お外禁止！ 僕の懐に入っているんだよ。」

「ぶう〜！ つまんない」

「柿ただちゃん…、柿の精は本当は樺太なんかにはちや駄目なんだよ。自然の摂理に違反しているんだから、我慢しなくちゃ」

風すっかに正論で説き伏せられて、柿ただちゃんは黙った。柿ただちゃんにだって分かっている。とんだけ二人に心配かけたかって事も。でも、気持ちと裏腹に、思いどおりにならない身体にイラついていた。折角三人で旅に出たのに、自分だけちや〜りんぼなんて…。

柿ただちゃんが口をつぐんでしまったので、他の二人も黙って、何となく空気が重くなった。風すっかは気分を変えようと、上空に飛んでみた。

「あれえ…！」

「どうしたの？」

だいちゃんも何か別の話題を求めていた。

「小さい部落が見える！」

「部落？ 妖精の部落？」

「うん、川沿いに…あ、小さい妖精達が見える」

「何か面白い話が聞けるかもね。ね！ 柿ただちゃん！」

だいちゃんは明るく柿ただちゃんに話し掛けた。懐で外に出られなくてもちゃんと旅に参加しているんだよって。柿ただちゃんは丸まったまま、うん…、と返事した。まだ、いまいちテラクションが上がらないようだ。

だいちゃん達が近付くと、その部落の住人達がわらわら出て来た。

「あららら」

風すっかが、にたにた笑いを浮かべた。その部落の住人は、ただちゃん族だったのだ。

「こんにちは」

だいちゃんも、何だかホツとして、挨拶した。

ところが…、そのただちゃん族はさわさわと囁き合うだけで、だいちゃん達を受け入れる感じじゃない。

「困ったな」

風すっかが抑揚ない声で言った。それを聞いてだいちゃんも、

思い出したようにワザとらしく言った。

「うん、困った！ 困ったなあ！」

「しょうがないわねえ！」

柿ただちゃんが、だいちゃんの懐から、ぽおんと飛び出した。

途端に、ただちゃん族にウエーブのように何かが伝わった。

道がざっと出来て、部落の奥から三人のただちゃん族が歩いて来た。三人は口を大きく開けたり閉じたりしながら例の『声のない唄』を唄っている。

柿ただちゃんも、だいちゃんの前の地面に降りて、同じように唄いだした。

ひとしきり唄い終わると、三人のただちゃんは一礼してニッコリ笑った。柿ただちゃんもニッコリ笑って、だいちゃんと風すっかに向き直って言った。

「ここは『アムールただちゃん』の里よ。遠来の珍しいただちゃん、その友人達を歓迎してくれるって」

二人はホツとした。アムールただちゃんに受け入れられたのもだけれど、柿ただちゃんの機嫌が直ったのが何よりだった。

三人は歓待を受けた後、アムールただちゃん達の春を迎える

準備を手伝った。身体の大きなだいちゃんは、重い物を動かす仕事とかを進んでやった。風すっかも、空を飛んで出来る仕事を引き受けた。

二人はここに少し逗留させて貰って、暖かくなるのを待つつもりだった。そうしたら、柿ただちゃんも元気に旅を再開出来る。それに歩き回るばかりが旅じゃない。こうやって見知らぬ一族に触れて、いろいろ教えて貰うのも、立派に冒険なんだ。

風すっかは、この機会に是非会得したい事があった。川岸で春の織物を晒しながら、アムールただちゃんに聞いてみた。

「ねえ、ボク、教わりたい物があるんだ」

「なあに？」

「ただちゃん一族の声のない唄、あれ、どうやって唄うの？」
アムールただちゃん達は顔を見合わせて、さざ波のように笑った。

「笑わなくてもイイじゃん、ボク、知りたいんだ」

「ごめんなさい、でもあれは、ただちゃん族にだけ聞こえる波長の声なのよ。仲間を確認する為の唄なの。風すっかさんに唄う事は出来ないわ」

「ふーん、そうなのか…、じゃあ、どんな歌詞なの？」

「んっとね…、まあ、唄い出しは、『ただいまあ』『おかえりなわら』」

「へ？ 初めての場所でも、ただいま…なの？」

「そうよ、ただちゃん族にこつて、どこのただちゃん族の里も、訪れる場所ではなくて帰る場所なの。だから、どこに行ってもまず、『ただいま』なの」

「へえ〜」

「世界中に帰れる場所があるなんて、素敵でしょっ？」

「うん、そうだね」

風すっかは、いつも普通に呼んでいた友達の名前の意味を、いきなりひょんと知った。

「えっと、その後は？ もっと長かったよね？」

アムールただちゃん達は、またくすくす笑いだした。

「何だよ、もしかして言えないような歌詞なの？」

「ごめんごめん、そんな事はないんだけど…、聞きたい？」

「うんー」

「やっつてよっ」

「そんなに勿体ぶられたら、余計に気になるよ」

「分かったわ、じゃ、言っわよ。え〜と、『まんまるお尻が』…」

「へ…？ まんまる…？」

「そう、『まんまるお尻がぶっぶくぶ、まんまるお腹がぼんぼりん。あなたもわたしもまんまるんるん、よっつこそよっつこそ、いっつくり』…と、まあ、そんな感じの歌詞よ」

風すっかは呆然として、反物を川に流しそうになった。

「そ…それが、仲間を確認する為の歌詞なの？」

「そうよ、初対面のピッピッこんなお問抜けな唄をうたうなんて、他種族間では有り得ないでしょ」

「は……はあ…」

「……って言っか、ただちゃん族以外では有り得ないだろう…」。

何事も分らない事を聞いてみるのは良い事だ。しかし探究心って奴は、時としてガツカリを連れて来る。聞かなければ良かった、と、しみじみ思った。

ただちゃん族に何やら神秘的なモノを求めていた自分が間違っていたのか？ 今後柿ただちゃんがこの唄を唄っている時、吹き出すのを堪えられるだろうか？

風すっかの心配は杞憂に終わった。

「この先、しばらく、ただちゃん族はいないんだって」

そろそろ旅立とうかという暖かい夜、柿ただちゃんが残念そうに言った。

「そ、そう、残念だね…」

風すっかはホッとしたような複雑な気持ちで言った。何も知らないだいちちゃんが、真面目な顔で言った。

「残念だね、ただちゃん族の『声のない唄』の儀式、結構好きなのに。神秘的でさ」

「ふ…ふ…ふ…そうでしょう!」

柿ただちゃんは胸をそらしたけれど、風すっかは口を結んで一生懸命黙っていた。

柿ただちゃんは心配してくれた二人にずっと謝りたいと思っていたけれど、何となく機会をなくしていた。

変に改まらないで元気でいる事が良いのかなあ…? とも思ったけれど、三人で綺麗な月を眺めている時、ふっと肩の力が抜けた。

「だいちちゃん、風すっか、心配かけてごめんなさい…、そんで、ありがとう」

だいちちゃんはいっこりして手をお月様にかざした。その大きな手に、二人の小さい手を重ねた。三つの手が月の光に洗われ

て、三人の心も澄んで行くような気持ちになった。

三人の所にアムールただちゃん達がやって来た。

「これが指したので…」

「?」

アムールただちゃんの手には、小さい笹で出来た小舟があった。

「これは貴方達と旅に出たいみたいね。持って行って頂戴。前に進む者を助くるモノ、『指し差し笹舟』ですよ」

「良き道行きを」

「良き道行きを」

「有り難く拝領致します」

秘宝の受け渡しにも決まり事の儀礼があるらしく、ただちゃん達はまた声のない唄を唄いだした。

かしこまって直立不動のだいちちゃんの横で、風すっかは必死に笑いをかみ殺していた。

く おしまい く

